



2011年 (平成23年)

9月号 (No. 796)

社団法人 日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

2011年、初歩的な事故が多かった夏の北アルプス・・・	1
被災者とともに東北の山へ・・・	3
「梅棹忠夫・山と探検文学賞」の 第1回受賞作品に『空白の五マイル』・・・	4
外国人による登山150年—オールコックからメスナーまで④・・・	5
東西南北・・・	6
越後の岳人「三巨匠」の寿像碑 外国人女性の厳冬富士登山の記録 山岳と湖沼は一体だ	
活動報告・・・	8
集会委員会	
支部だより・・・	9
越後支部／東九州支部	
図書紹介・・・	12
会務報告・・・	14
ルーム日誌・・・	15
会員異動・・・	16
新入会員・・・	16
図書受入報告・・・	16
INFORMATION・・・	17
消えた「小島烏水」レリーフ・・・	18
大学山岳部の復活奮闘記③・・・	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木・・・10～20時
水・金・・・13～20時
第2、第4土曜日・・・閉室
第1、第3、第5土曜日・・・10～18時

2011年、初歩的な事故が多かった 夏の北アルプス

羽根田 治

今年の夏山も、中高年登山者による不注意な事故が多かった。特に北アルプスでは、初歩的な原因による落石、転滑落が目についた。山岳遭難について多くの著書がある羽根田治氏に検証してもらった。

今年の夏山シーズンも終わり、北アルプスを抱える長野・富山・岐阜の3県警ではシーズン中の遭難発生状況をそれぞれ発表した。詳細は報道や各県警のウェブサイトに等をご覧いただくとして、全体的な傾向で言うと、今夏は天候不順と東日本大震災および福島原発事故の影響を受けて登山者が減少したため、遭難事故も前年に比べると少なかったようだ。年代別

では相変わらず中高年層、とりわけ60歳以上の高齢者の事故が多く、事故要因では転滑落や転倒による事故が目立っていた。そんななかで、なんとも痛ましかったのが8月7日に奥穂高岳のザイテングラートで起きた落石事故である。この日の朝、60歳代の夫婦とその孫の3人がザイテングラートを涸沢に向けて下山している途中、8歳の孫が落石を受けて

バランスを崩し、祖父がそれを助けようとしたところ、2人とも滑落ちて命を落としてしまった。この事故については、ネット上で「ほかの登山者による人為的落石だった」という情報も流れているが、真偽は定かではない。ただ、この事故のあとに槍・穂高連峰を縦走した知人の話によると、今にも落石を起こしそうな(あるいは落石を起こしながら歩いている)登山者が少なからずいて、ずいぶんヒヤヒヤしたそうだ。

岩場やガレ場を歩くときには、なるべく石を落とさないような歩き方をするのが登山技術の基本であるが、彼が見かけた登山者らはその基本が身につけておらず、まるで石を蹴飛ばすようにして歩いていたという。おそらく山を歩き慣れていない初心者がいきなり3000以上の稜線に来てしまうから、そういうことが起こるのだろう。「あれでは怖くて夏の最盛期の槍・穂高の稜線は歩けたものではない」と彼は言っていた。

人為的落石か自然落石かは不明だが、ザイテングラートでの事故のあと、8月17日には北穂高岳の滝谷第一尾根を登攀していた61歳の男性が落石を受け、指を3本切断するという事故が起きている。21日には立山の1ノ越付近で団体登山の一行がミカン箱大の落石に遭い、11歳の子どもが軽傷を、21歳の女性が骨折の重傷を負った。さらに28日には剣岳早月尾根の通称「カニノハサミ」付近で落石が発生し、登山中だった8人パーティのうち69歳の男性が頭を切り、

61歳の女性が腕を骨折している。

登山において落石は想定されるリスクであり、落石の危険が高い場所ではほかの登山者がいるときは、落石に充分気をつけるようにと言われてきた。そのためか、あるいは因果関係を立証するのが難しいためか、人為的な落石によって登山者が死傷した場合でも、落石を起こした当事者が責任を問われたというケースはこれまでなかったように思う(あるのかもしれないが)。しかし、この夏に知人が目撃したように、故意ではないにしろ、あまりにも不用心に落石を起こす登山者があとを絶たないとなると、これからは個人賠償責任や過失致死(傷害)が問われるようになっていくのかもしれない。

さて、もうひとつ気になったのは、昨夏に引き続き転倒事故が多いように感じたことだ。たとえばざっとあげただけでも以下のような事故が起きている。

7月18日 太郎平から折立へ下山中の71歳女性が木の枝につまずいて転倒、膝を骨折。同日、朝日岳付近で57歳女性が下山中に足を滑らせて転倒、肩を脱臼。

7月26日 五色ヶ原から黒部湖へ向かっていた62歳女性が岩と岩の間に足を挟んで転倒し、足首を骨折。

8月4日 薬師沢付近の登山道で41歳男性が足を滑らせて転倒、足首を骨折。

8月10日 黒部五郎岳カール、カミナリ岩付近で19歳男性が浮き石に乗り転倒、足首を負傷。

8月12日 水晶小屋に向かっていた62歳男性が東沢乗越付近で石につまずいて転倒し負傷。

8月20日 朝日岳の木道で67歳女性が足を滑らせて転倒し、手首を骨折。同日、太郎小屋から高天原山荘に向かっていた64歳男性が、金網に石をつめたジャ籠に足をひっかけて転倒し負傷。

こうして見てみると、北アルプスのなかでも最奥部のエリアで転倒事故が多発していることに気づく。ちなみに昨夏も薬師沢や雲ノ平、朝日岳など、山深い場所での事故が目立っていた。これは、長丁場の行程により疲労が蓄積し、足の踏ん張りがきかなくなったり注意力が散漫になったりするためだと思われる。

その根底にあるのは体力不足。

余裕を持って長い行程を歩き通すには、それなりの体力が必要となる。単に憧れだけで山やコースを選ぶのではなく、自分の体力を客観的に把握したうえで、無理のないプランを組むようにしたい。

また、転滑落事故については、剣岳と西穂高岳で多発していることが目を引く。剣岳では7月17日、長次郎谷雪渓を下山していた62歳女性が約150メートル滑落して負傷したほか、翌18日には早月尾根を下山中の67歳女性がエボシ岩付近で滑落して死亡。8月24日にも68歳女性が「前剣ノ門」付近で約15メートル転落して死亡するという事故が起き、28日には早月尾根を登山中の59歳男性が約100メートル転落して命を落としている。

もう一方の西穂高岳では、ピラミッドピーク付近で3件もの事故が発生している。まず8月16日には下山中の36歳女性が約30メートル滑落して足を負傷、翌17日には52歳男性が約100メートル滑落し死亡した。さらに24日にも登山中の45歳女性が約100メートル滑落して命を落としている。このうち2件の死亡事故は、切り立った岩が濡れていて足を滑らせたことによるものだとい

う。このほか、7月17日、奥穂高岳を目指して縦走していた65歳男性が独標の北側の尾根でバランスを崩して滑落し、肩を骨折するという事故を起こしている。

剣岳や西穂高岳で起きたこれらの事故の遭難者の技術レベルがどれぐらいだったのかはわからない。だが、総じて遭難事故の根本的な要因が技術・体力不足にあることはよく指摘されるところだ。

剣岳は北アルプス北部の名峰として、西穂高岳は北アルプス入門の山として、また西穂高岳と奥穂高岳の縦走コースは国内屈指の難ルートとしてそれぞれ人気が高い。しかし、そこへ行くのなら、その山、そのコースに見合うだけの技術や体力を備えていることが前提となる。

登山者ならば誰もが一度は憧れる北アルプスであるが、昔と比べるとその敷居はだいぶ低くなった。それは北アルプスの難易度が下がったわけではなく、登山者がこぞって背伸びをするようになった結果であろう。今夏の北アルプスでの事故を振り返るにつけ、その負の面が見え隠れしているような気がしてならない。

トピックス

被災者とともに東北の山へ

田部井淳子

3月11日、東日本をおそった大地震は、私のふるさと福島にも、大きな影響を及ぼした。地震、津波に加え、東京電力福島原子力発電所の放射能漏れと、それに伴う風評被害で、半年を過ぎた現在でも復興のきざしは見えていない。

私は、5月号の会報『山』で「東北の山へ行こう」という提案をした。それは、私たち登山者が東北の山へ行って泊まり、地域の人たちと話し、地域の食を楽しみ、お土産を買って帰ることも、支援のひとつになると思ったからだ。

避難所を視察していたある人から、震災で疲れ切った人たちと自然のなかを歩く計画は応援のひとつになるのではないか、というアドバイスをもらい、芦の牧温泉観光協会を紹介してもらった。そこには檜葉町^{なちは}の人たち600人近くが避難しているという。そこで第1回は6月13日に裏磐梯五色沼探索路を歩く計画を立てた。参加者は応援のHATJの仲間たちも加え19人。

当日は天気恵まれ、五色沼の前で自己紹介したのち、ストレッチして歩きはじめた。「五色沼の色って、こんなにきれいな」「磐梯山の形がこんなに見えるなんて、初めて」と、声があがり、花や沼の説明の合間にも会話がはずんでいた。

「すぐに避難せよ」というアナウンスによってバッグひとつで家を出た檜葉町の人たちは、いまだに1度も家に帰っていないという。ストレスも多いに違いない。終点となった柳沼に着いたときの皆さんの表情は、歩きはじめたときとはまったく異なっていた。自然が与えてくれたエネルギーを体中につめこみ、明るく生き生きとしていた。全員で記念写真を撮って散会した。

第2回は福島民友新聞社と土湯温泉観光協会や地元企業の協力を得て、土湯温泉に避難されている人たちと安達太良連峰のひとつ鬼面山^{きめん}に登ることにした。7月11日、安達太良山は晴れ。HAT

Jの仲間たち7人の協力を得、初心者が大半の総勢28人で鬼面山へ。ブナの森に入ると「気持ちいい」「まさか山に登るなんて考えでもみなかった」「家もなにもかも流れてしまったけど、過ぎてしまったこと。これからのことを考えなくちゃ」と明るい声で語ってくれた。頂上では全員でバンザイの声。みんなの明るい笑顔を見て、私もうれしかった。

そして3回目の東北応援特別企画は、8月17日から1泊で行った会津駒ヶ岳。今回は、6月に行なった東日本応援フォーラムに参加してくれた日本トレッキング協会やHATJの会員など県外者ばかり22人が集まった。

17日は駒止湿原を散策、18日は天気にも恵まれて会津駒ヶ岳に登山、全員無事に自然を楽しむことができた。駒ノ小屋の前には、チングルマ、サクラソウ、イワウチワ、キンコウカなどが咲いていて全員大喜び。宿泊した檜枝岐の宿では、震災以来、20人以上のグループに来てもらったのは初めてのこと、とても喜んでもらった。「こうした企画があれば、また参加したい」という多くの参加者の

声も聞かれた。

8月21日から24日には、福島で被災した3家族と一緒に北アルプスの立山に登った。大熊町の自宅を津波で流され会津若松の仮設住宅に暮らす家族3人、福島原発から半径20^キ圏内の富岡町を離れ、郡山で避難生活を送る家族4人、そして津波に流され三春町の仮設住宅に暮らす家族3人。ほとんどの参加者は初めての登山で、室堂から浄土山経由で雄山に登った。

ずっと天気がわるかったのだが、登頂の24日は久しぶりに晴れ、苦労して登った頂上からは、雲海の合間から富士山や白山、能登半島まで見渡せ、全員で万歳し、登頂を喜び合った。「富士山を見たのは初めて、感激しました」「震災には負けられない。家族でがんばろうな」そんな声が聞かれた。

これからも、10月4日から5日に秋の西吾妻山へ、18日は裏磐梯、25日には安達太良山のハイキングを予定している。手伝ってくれるボランティアも募集中だ。

こうした被災者や県外者を連れて、東北の山へ「登って、泊まって、買って」キャンペーンを今後も続けていこうと思っている。

カルチャー

「梅棹忠夫・山と探検文学賞」の第1回受賞作品に『空白の五マイル』

小長谷有紀

昨年7月に90歳で亡くなられた梅棹忠夫氏の、限らない「未知への探求」とこれまでの業績を精神的な支柱として、さらに「探検」への復権と新たな展開を期して、優れた記録作品を顕彰する「梅棹忠夫・山と探検文学賞」が創設された。その第1回受賞作品に角幡唯介氏の『空白の五マイル——チベット、世界最大のツアンポー峡谷に挑む』（集英社）が選ばれ、7月21日に発表、11月2日に表彰される。

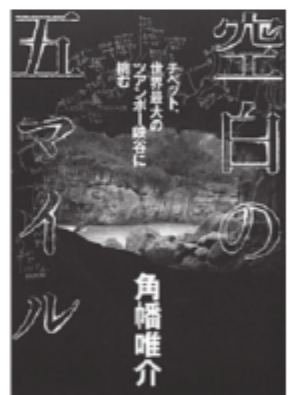
なお、選考は5月26日、東京のアルカディア市ヶ谷で、小山修三選考委員長、江本嘉伸（地平線会議代表）、井口弥寿彦（信濃毎日新聞社文化部長）、川崎深雪（山と溪谷社副社長）選考委員の4名で行なわれ、最終的に残った『ヤノマミ』（NHK出版）、『空白の五マイル』（集英社）、『インパラの朝』（集英社）、『アースダイバー』（講談社）の4冊について討議された。3月から6月にかけて開催さ

れた「ウメサオタダオ展」の実行委員長であり、国立民族学博物館教授でもある小長谷有紀氏が、産経新聞8月4日付朝刊「越境精神」梅棹忠夫の残したものの⑫に「山と探検文学賞 リスクを回避する探検」と題して寄稿されていたので、氏の了解を得て、ここに転載させていただいた。（編集部）

*

去る7月21日、国立民族学博物館で、初代館長の名を冠した「梅棹忠夫・山と探検文学賞」の第1回受賞作品が発表された。角幡唯介さんの『空白の五マイル——チベット、世界最大のツアンポー峡谷に挑む』（集英社）である。

この作品は、すでに昨年、第8回開高健ノンフィクション賞を受賞しており、さらに今年4月に第42回大宅壮一ノンフィクション賞を受賞していたので、これでトリプル受賞となる。聞くところによれば、東日本大震災のために発表が遅れた結果、大宅賞に先行され



2010年11月
集英社刊
四六判 312頁
定価 1680円

てしまったらしい。だから、第1回の贈賞がはからずも3度目の受賞になったのだった。

開高賞ならアウトドアに関する作品がふさわしいとしても、大宅賞の対象はノンフィクション全般であり、一方、梅棹賞は「山と探検」に限られる。三者のこうした重なりを考えると、ノンフィクションの中で当該作品がよほど秀でていたに違いない。

地理上の空白などもはやあるまいという大方の常識を超えて、チベットにある世界最大の渓谷にある未踏査地を2002～03年と2009年の2度にわたって単独で歩いた記録である。人類未踏査とされるのは5マイル約8キロ。死の危険を顧みず、冒険し、生還した。

本人のブログには「書くことを前提に冒険行為をした場合、原稿に書くことを常に意識して行動するため、行為がどうしてもそこにひきずられてしまう。わたしの場合は書くことを前提に探検や冒険

をするので、よって行為としては純粹ではない」とある。

彼にとって、探検と冒険は同義であり、どちらも純粹だが、書く目的があると不純になるというわけだ。さしずめ、結婚を前提としたおつきあいは純愛にはならないということか。

梅棹なら、行きたい、見たい、知りたいという衝動と同じくらい、書きたい、伝えたいという衝動があることを、きわめて純粹に愛でたのではないかと想像される。

ただし、むしろ、冒険と探検の違いにはこだわった。リスクを犯すことにしびれるのではなく、リスクを事前に回避する知的営みを重視した。単独行であれば冒険が許されもしよう。リスクは本人が背負えばいいだけのことだ。しかし、他人にリスクを強いてはならない。それが2人以上での登山や探検の鉄則となる。

リスクといえば、わたしたちは今、山にのぼらずとも、十分に大きなリスクとともに生きること強いられている。次回の梅棹賞の候補作には、意外な領域を探検してみせる作品が出てくるかもしれない。

ヒストリー

外国人による登山150年——オールコックからメスナーまで④

8000^{メートル}峰初登頂者の来日

ヒマラヤの巨峰と呼ばれる14座の登頂者は全部で41人。そのおよそ6分の1が来日している。

日本人の山マナスルに、今西壽雄と一緒に初登頂したシェルパのガルツェン・ノルブが昭和31(1956)年に来日。初登頂成功へのお祝いとしての招待だった。

人類最初の8000^{メートル}峰登頂と謳われたアンナプルナ初登頂者モーリス・エルゾーグは、昭和37(1962)年にフランスのスポーツ大臣として来日。2年後に開催予定の東京オリンピック準備のためであった。東京オリンピックには、夫妻で来日している。

世界最高峰エベレストの初登頂者テンジン・ノルゲイの来日は昭和39(1964)年、日本の外務省の招きによるもの。

エドモンド・パーシヴァル・ヒラリー卿の初来日は昭和45(1970)年。大阪万国博覧会協会の招きによるもの。日本山岳会の会

上村信太郎

員と、ルイーズ夫人同伴で立山、富士山に登った。

シシヤパンマ(ゴサインタン)初登頂者の王富洲が、昭和55(1980)年に中国登山協会の「中国登山友好代表团」の一員として来日。そのシシヤパンマの隊長を務めた許競は、昭和61(1986)年、松本で開かれたシンポジウム出席のため来日している。

ブロード・ピークとダウラギリ(スイス隊に参加)2座に初登頂したオーストリアのクルト・デュームベルガーが、平成7(1995)年に国際映画映像祭(JIFFAS)出席のため来日した。

サミットやシンポジウムの開催

第二次大戦からおよそ半世紀、いつしか日本は世界第2の経済大国となった。そしてそれまで欧米を中心で開催してきた国際山岳連盟(UIAA)をはじめとする山岳団体の会議や大会、シンポジウムが、経済力を反映して日本で頻繁に開かれるようになった。とり

わけ平成3(1991)年には世界のトップクライマーなど、かつてない豪華な顔ぶれが一堂に会した。

まず、「第5回ザマウンテン・サミット」が東京で開催され、「山岳地帯の環境保護・保全」をテーマにシンポジウムが開かれた。三浦雄一郎実行委員長をはじめ英、米、加、豪、仏、印、7カ国から14人が出席。メンバーは、アメリカからジョン・ロスケリーと七大陸最高峰登頂者ディック・バス。イギリス人最初のエベレスト登頂者ダグラス・スコット。オーストラリアからティム・マッカートニー・スネイプ。フランスからジャン・クロード・ドロワイエ、など。

同年秋、東京と富山で「山岳環境保護国際シンポジウム」が、日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラスト(HATJ)主催、山岳4団体共催で開催された。ゲストはニュージーランドからヒラリー卿、フランスからエルゾーグ、イギリスからヒマラヤ鉄の時代をリードしたクリスチャン・ボニントン(初来日は1977年で、中国登山の帰途、国際複合企業日本支社の招きによるもの)、イタリアからは8000^{メートル}峰全山登頂のラ

インホルトメスナー(初来日は1976年、自作映画宣伝のため)、インドからモハン・S・コーリなど。このほかスイス、中国、旧ソ連、ネパール、パキスタン、ブータンなど、12カ国から13人が集合。東京宣言が採択、発表された。

これからの外国人登山

明治の外国人は、日本人にスポーツ登山を伝えたが、いまや日本の一部の山は国際色豊かな登山客で溢れている。また個人交流登山も盛んで、ボランティア組織による外国人との交流登山も増えた。

今後は、日本独自の登山史や文化を世界の登山者に発信してはどうだろう。日本人と一緒に日本百名山制覇をめざす外国人が現われたら、きつと楽しいに違いない。

150年前、歴史的な一步を富士山に刻んだオールコックは、草葉の陰からいまの登山界をどのようにに思っているのだろうか。

【主要引用文献資料】

『山岳』、会報『山』、『山と溪谷』、『岳人』、『岩と雪』、『山岳年鑑』、『山書研究』、『山書月報』、『新稿日本登山史』、『岳人事典』、『世界山岳百科事典』、『目でみる日本登山史』、その他

東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

越後の岳人「三巨匠」の 寿像碑

山崎幸和

日本山岳会設立発起人の一人、深才村(現長岡市)深沢出身の第二代会長・高頭仁兵衛(会員番号3)の寿像碑を知る人は多い。

1950(昭和25)年7月、古希を迎えた記念に初代越後支部長、藤島玄らにより弥彦山に建立され、毎年「高頭祭」が開催されている。1889(明治22)年夏、高頭13歳のとき、恩師であった大平晟と弥彦山に初登山し、登山の趣味を解したことにちなむという。その撰文は武田久吉が担当した。

ところでこの高頭仁兵衛の寿像のほか、越後にはもう2人の岳人、大平晟と藤島玄の寿像が建立されているが、あまり知られていないので紹介しておきたい。

大平晟(会員番号31)は、高頭に

登山も指導した片貝村(現小千谷市)高梨出身の教師であった。日本近代登山の先駆者の一人として、英国人ウォルター・ウエストン、志賀重昂に次いで、第3番目に日本山岳会の名誉会員に推挙された登山家でもある。苗場山の開拓者としても名高い。その寿像碑を高頭は1935(昭和10)年7月、師が古希を迎えた記念に苗場山頂に建立した。その撰文も高頭による。寿像制作の羽下修三は、大切に保存してきたレプリカを30余年のち遺族に寄贈。それにより1970(昭和45)年11月、高梨の生家前にも立派な大平の寿像碑が建立された。

藤島玄(会員番号1033)は、戦災で休刊中であつた会報『山』133号を、1946(昭和21)年4月、2年ぶりにはるばる新潟市から135号までの発行に尽力。



大平晟寿像碑(苗場山、羽下修三・作)



高頭仁兵衛寿像碑(弥彦山、羽下修三・作)



藤島玄寿像碑(楓差岳、金子直裕・作)

戦争により会員が召集、疎開、戦災などで支離滅裂状態だった日本山岳会の再組織に貢献した。そして1946(昭和21)年12月、関西支部に次ぐ2番目の戦後最初の越後支部を結成して、初代支部長と

なる。その功績については枚挙にいとまがなく、支部機関紙『越後山岳・第10号』に詳しく記載されている。寿像碑は大正末期から開拓してきた飯豊連峰の楓差岳南峰に1966(昭和41)年7月、還暦を記念して齊藤平七、佐藤一栄、室賀輝男・支部委員らが発起人となって建立された。碑名「玄翁碑」は松方三郎の筆、撰文は佐藤一栄によるもの。

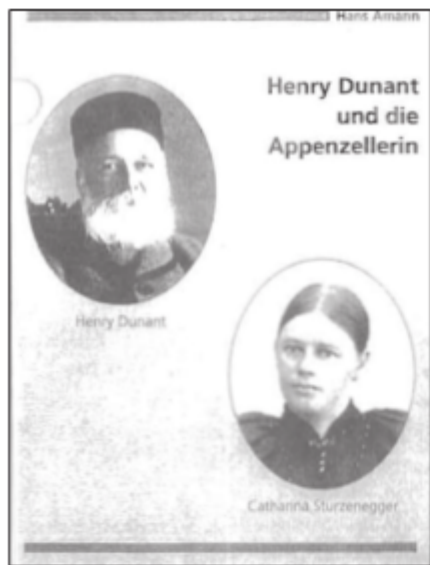
この3つの寿像碑、大平晟、高頭仁兵衛、藤島玄は、越後が誇る三岳人である。ともに日本山岳会名誉会員という栄誉を受けられ、私たち越後支部員は「越後の三巨匠」と称し、尊敬してやまない。それぞれ縁ある山に寿像が建立され、今でも多くの登山者に見守られ、その偉大な功績が称賛され、そして偲ばれているのである。

なお、寿像制作の両氏は、日展、県展入賞多数の県内彫刻界の高名作家である。

外国人女性の厳冬期富士登山の記録

三浦一

女性の富士登山記録として、よ



「アンリ・デュナンとアッペンツェルの女性」の表紙

く知られているものに、1867(慶応3)年のパークス夫妻、登山黎明期の1895(明治28)年10月12日から12月20日にかけて、富士山頂で夫の気象観測を手伝った野中千代子。その後、1927(昭和2)年元旦に登頂した中村テルの厳冬期富士登山がある。

ところが、外国人女性のカタリーナ・シュトルツェンエッカーによる、厳冬期富士登山の記録はあまり知られていない。

「1908年(明治41年)2月、31人からなるグループの唯一の女性として霧と零下25℃の雪の中3776mの富士山登頂を決断した。

無事山頂に到達したグループは御殿場から人力車に乗り小山村にあるハンセン氏病の施設を訪れています。

登山の時、彼女の履いていた藁沓と竹とわら縄で作られたガンジ

キはスイスのベルン歴史博物館に寄贈されました」

と、ハンス・アーマン著『アンリ・デュナンとアッペンツェルの女性』(日本赤十字社学園法人本部 五十嵐清・訳)に、女史の年譜も併せて記されている。

ここでいう唯一の女性とは、1904(明治37)年2月、日露戦争勃発時における日本赤十字社の救護活動の実態調査の命を受けて、赤十字の創始者アンリ・デュナンの特使として、同年3月、日本に派遣されたスイス人、カタリーナ・シュトルツェンエッカー女史(当時54歳)のことである。

カタリーナは、日本赤十字社とともに戦地に赴き負傷者の救護活動に参加したかったが、日本の規則により彼女の強い願いはかなわなかった。しかし、赤十字の身分証明書を持っていたことで、日本国内での自由な旅行が許されていた。

カタリーナは秀峰富士山の優美さに、生国のスイス・アルプスを重ねていたのだろう。

1908(明治41)年5月、帰国したカタリーナは、まず最初にアンリ・デュナンを訪ね、日本のこ

とや日本赤十字社の活動を報告している。

1929(昭和4)年10月11日、チューリヒで逝去。アンリ・デュナンと同じチューリヒのシルフェルト墓地に埋葬されている。

山岳と湖沼は一体だ

関塚貞亨

会報『山』7月(794)号、総会記事2頁、自然保護の質疑に対し、吉永リーダーは「自然保護では湖などを含み対象が広すぎる」と答えているが、山岳会草創期の歴史認識が不足している答弁であり、間違っている。

小島鳥水および博物学同志会の若い発起人たちは、山岳と湖沼の関係の深さを理解していた。それゆえに当時の湖沼学の第一人者、田中阿歌麿博士(子爵)を会員に招き、1910(明治43)年5月8日の第3回大会で講演もしている(百年史本編200頁参照)。

私は、日本郵船の船員だった金子弁作さんから「水産学校の学生だったとき、田中博士のお伴で、鉄棒・帆布製のボートを担いで白

馬大池など山上、山中、山麓の湖沼群の研究をお手伝いした」と聞いたことがある。

いうまでもなく、富士山と富士五湖は風景だけでなく自然も影響しあっている。日本一の琵琶湖も比良や伊吹だけでなく、比叡山に続く京都東山、私の心情では京都の北山も琵琶湖の自然と繋がっているように思っている。

ヒマラヤやアルプスなど五大陸高山の氷河の後退問題、山川陽一会員が指摘していた「ヒマラヤの氷河湖の危険」を考えるだけでも、山岳の保護・保全は、地球環境、人間の日常活動と深く関わっており、山だけを見ていたのでは山の自然は守ることができないのは自明のことである。

定款で山を守るための表現が変わったとしても、山だけを見て山岳保護・保全ができるわけではない。自然保護委員会は解つてい

私『山岳第一〇五号』(2010年発行)に、山岳会の自然保護活動の歴史とこれからの活動への提言を書いた。ぜひ読んでいただきたい。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

集友委員会

夏の欧州アルプス登山(第3回)

恒例の夏の欧州アルプス、今夏は7月8～18日に催行。参加者6名で、オーストリアとスロヴェニアの最高峰・グロースグロックナー(3797m)へ山名は「大鐘楼」を意味し、東西1200mのアルプス山脈東部に位置、初登は1858年と、トリグラウ(2864m)へスロヴェニアの国旗にも使われているスロヴェニアのシンボルとされる山」の2峰を目指した。

8日、成田発ウィーン経由インスブルック着、車でキッツビューエルのホテルに22時到着。ここはトニー・ザイラーの故郷。翌9日朝、カテリーナ教会を訪ねザイラーのお墓に詣でた後、車でグロックナー南麓のカルス村、標高2802mのストウデュル小屋ま

で登る。

10日、5時出発。ガイド達と合流。南面から頂稜に突き上げるルイゼングラート氷河の末端に向かう。露岩帯でザイルとアイゼン装着。4班に分かれ氷河を詰め、勾配の増した氷河から右手の東稜に移り、近年改修されたフェラータ沿いにエルゾヨハン小屋3454mに登る。9時到着、ランチャイム。頂上まで残り344mの登りは、雪田を越え急なルンゼを詰めて頂稜に出る。ここから急峻な雪の岩稜を伝い、頂上に11時半ごろ全員到達。磔のキリスト像が金色に輝く十字架に抱擁。

後半は、オーストリアの隣国スロヴェニアのトリグラウを目指す。国境を越えブレッド湖へ。ここはハップスブルグ家の別荘地。手漕ぎゴンドラで聖マリア教会の小島を訪ね、中世のお城見物。石灰岩が白く輝く東部アルプスの峰々を



3回目を迎えた夏の欧州アルプス、ストウデュル小屋前で

愛でながら、移動と観光の1日。

13日、トウヒ、カラマツの森、紀元前より放牧が続けられる高原、アルペンローゼが咲き乱れる草原で昼食、エーデルワイスを見る。

ツアーリーダーのツベートさん持参の桃、キュウリのサービスあり。彼はスロヴェニア人、奥さまは日本人。

グレダリッツァ小屋に到着15時。この小屋は天水を池に貯め、風力発電で電気を賄い測候所を兼ねる。

14日、朝7時出発、濃霧で風が強い。岩稜登攀、ルートはヴィアフェラータ完備。何も見えず高度感なし。頂上付近は風が冷たく、

雨具上衣の襟を立てて凌ぐ。殺風景な頂上から、南面のヴェルスカドリーネの谷へ下降。急峻な石灰岩の岩稜帯を慎重に下る。昨日通ったボドニコウ小屋へ登り返し休憩。花が咲き乱れる森林地帯を抜け、麓の牧場を散策気分歩き、迎えの車で山麓の村のレストランへ。ここで昼食。まずは目標完遂に祝杯。ツベートさんに感謝。うまいビールを堪能し、紅鱒料理に舌鼓。

最終日は「カルスト地形」の語源である「カルスト地方」で、欧州最大級のポストイナ鍾乳洞、首都リュブリアナ城郭と街並み散策。中欧アルプスの山旅を終える。

夏の欧州アルプス登山シリーズはお陰さまで3年前の企画が達成。3年3回シリーズ、延べ5カ国、38名の方が参加された。

2009年、ドロミテ山塊、マルモラーダ。2010年、グランパラディゾ未踏、スイス・アラリンホルン。2011年、グロースグロックナー、トリグラウ。

来年度以降、新たな発想で楽しい集友行事が継続することを期待したい。ありがとうございました。

(野崎和彦)

支部

だより

全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

越後支部

「第1回中部ブロック四支部交流会」を開催

7月23・24日に「第1回中部ブロック支部交流会」が、越後支部主催により新潟県中魚沼郡津南町のニューグリーンピア津南と、苗場山小松原湿原で開催された。地元越後支部13名、信濃支部12名、山梨支部11名、静岡支部10名の合計46名の参加者があり、盛会のうちに終わることができた。

越後、信濃、山梨、静岡の支部が中部ブロックとされたのは、今から29年前の昭和57年のころらしい。この年に最初の支部懇談会が信濃支部担当で開催され、翌年、静岡支部が担当したが、3年目から中断。そして、16年前の平成7年に中部ブロックで創立90周年記念式典と登山が、山梨支部担当で開催された。さらに6年前の平成

17年の100周年記念に、越後支部が担当で四支部の交流が図られてきたというのが、これまでの経緯である。

昨年春から中部ブロックの交流会を復活しよう、という四支部間の意見交換がなされ、再開の第1回は発案した越後支部が担当、事業委員会(井出秀雄委員長)で企画推進して実施にこぎつけた。

23日15時過ぎから受付を開始し、各支部の参加者が続々と集合し始め、16時15分から16時50分まで46名全員が集合して合同会議を行なった。山崎幸和・越後支部長より歓迎のあいさつと今回開催の主旨説明があり、「今後の支部交流のあり方」を主題に審議に入った。決議内容としては、①四支部交流会を今後毎年継続して開催する、②次回主催は信濃支部が担当する、③その後は山梨支部、静岡支部、そして越後支部の輪番で実



小松原湿原散策の朝、全参加者で記念撮影

施していく、などの内容を全員一致で賛成していただいた。

18時30分よりの懇親会は、再び山崎越後支部長のあいさつの後、飯村富彦・信濃支部長、長田義則・静岡支部副支部長、深沢健三・山梨支部委員長よりあいさつをいただき、開宴は、塚原賢勝・信濃支部副支部長から乾杯の音頭をとっていた。各支部からの多数の御好酒は、信濃支部の「大雪渓」、山梨支部の「勝沼ワイン」、静岡支部の「高砂」、越後支部の「越乃寒梅」などの地酒が、また急遽事情により欠席となった静岡支部の青島秀夫永年会員からも秘蔵酒をいただいた。

当初、各支部ごとに固まっていた席も、宴がすすむうちに座が崩れ交流の会話が弾み、お国自慢や山自慢に花が咲き、初対面同士でも旧知の仲間同然の大盛会となった。あっ！という間に2時間余が経過してしまい、橋本正巳・越後支部副支部長の中締め後もしばらくは余韻が続いた。

翌24日は、前夜の雨模様が朝日に輝く好天に恵まれ、今回のメイイベントである小松原湿原記念山行を祝福するかのようであった。7時15分に玄関前に集合し、全員で記念撮影後マイクロバス2台に

分乗して出発した。宿舎より約20分で大場林道のゲートに到着した。自然保護のため通常は閉鎖されているこの林道を、今回、津南町のご厚意により通行許可をいただき、さらに車によりアプローチを短縮し、8時15分に登山口に到着した。小松原湿原は、苗場山の北斜面山腹にある湿原地帯で、標高1340～1550mの間に下ノ代、中ノ代、上ノ代という地名の3段状の湿地帯と池塘が形成されていて、越後でも自然保護が徹底されている特別区域である。

8時30分、大場林道登山口を越後支部の込山孝会員の先導で出発。9時45分、中ノ代、10時45分、上ノ代(小松原避難小屋)に到着した。途中の湿原にはモウセンゴケやワタスゲが今を盛りと一面群生をなし、そしてヒメシヤクナゲ、トキソウ、サワラン、イワイチョウ、キンコウカなどの湿地植物の他にマイズルソウ、ゴゼンタチバナ、ツマトリソウなど咲き乱れて実に素晴らしく、それに時々霧がかかり、参加者は幻想的な景色を満喫した。この日の湿原はわれわれだけの独占場で、高山植物を写真撮影したり記念撮影のため、隊列は

遅々として進まずのんびりとした山行をすることができた。

昼食後、11時30分、下山開始。13時、大場林道登山口着、迎いのマイクロバスに便乗し13時45分、宿舎到着。天候にも恵まれ全員無事で十分満足していただけた親睦山行であった。閉会のあいさつの後、来年の再会を約束して散会となった。

最後となったが、当地の豪雪は全国でも有名で、今冬の積雪量は4m以上に達したという。そんなところに、東日本大震災直後の3月中旬に起きた北信濃地震で、林道も豪雪と地震で損傷。そうしたことから本計画の実施については一時危ぶまれたが、これらの情報や小松原湿原入山について多大なご尽力いただき、かつ、現地解説案内役を務められた滝澤寿一氏と中沢武彦氏はじめとする地元津南山岳会各位には、改めて厚くお礼申し上げたい。

(桐生恒治)

第54回高頭祭

越後支部恒例の高頭祭が7月25日に54回を迎え、快晴の弥彦山大平園地の高頭仁兵衛翁寿像碑前

で14時30分から開催された。

前日は「第1回中部ブロック四支部交流会」が開催された。連日の大行事であったが、平山善吉名誉会員(21代会長)が私的立場で臨席されるという朗報もあって、約60人の参加者で賑わった。

開会のあいさつで山崎幸和・越後支部長から「毎年、寿像前で仲間が一堂に会して親睦を深めていることは、岳界の発展につながることであり、高頭翁が何より



弥彦山大平園地で行なわれた第54回高頭祭

も喜んでおられることと思う」と、高頭祭の意義が語られた。

続いて、横山征平・支部委員によるお祓いと玉串献上。そして、阿部信一・県山岳協会長と佐竹信幸・支部委員らにより、翁がこよなくたしなまれた日本酒で寿像を清め、神事形式の式典を終えた。

式典後、「高頭仁兵衛と日本山岳会」と題し、平山名誉会員から記念講演をいただいた。講演では、「越後から創立発起人に加わり、金銭面や会員増強に強力な支援を続けられ、登山を大衆に普及させた功績は計り知れない。高頭翁い

なくして今日の日本山岳会はありえない」と、その功績が語られ、みんなでその遺徳を偲んだ。

私は高頭の偉業については、その研究家でもある室賀輝男・支部名誉会員から何回も拝聴していた。また、『第50回記念・高頭祭のあゆみ』記念誌(越後支部刊)や、会報『山』767号の山田一男会員の「高頭仁兵衛翁の功績と遺徳を偲ぶ」の寄稿文などからも知り得ていた。だが今回の平山名誉会員の講演で、全国視野から、首都圏や本部の立場から見た翁の功績や評価について詳しく知ることができ、改めてその偉大さを再確認したのであった。

今でも全国から照会がある『第50回記念・高頭祭のあゆみ』は、残念なことに、もう残部なしのことだ。そのため、今回も遠路はるばる参加していただいた日向祥剛(北九州)、平井喜久枝(千葉)両会員にも進呈することができなかったという。強く復刊を願うものである。

この日はまた昨年に引き続き、桜井昭吉・自然保護委員長らによる登山道の清掃も行なわれた。

(目崎貞良)

東九州支部

第10回青少年体験登山大会

東九州支部の青少年体験登山大会は、そのスタートが2002(平成14)年に遡る。この年は国際山岳年として、山岳を通して地球環境の保全を目指す年と位置づけられ、各種の催しも行なわれた年である。支部もその一環として若者をはじめ1人でも多くの人たちに、自然とのふれあいを楽しむ機会を提供しようと、記念行事で取り組んだものである。

そして、翌年以降も青少年や初心者に対する山へのいざないとして、この行事を継続的に続けるこ



3班が集結した、久住山頂にて

ととなり、今年はその10周年に当たる。この記念すべき年の大会として、より多くの参加者を募るため支部役員が奔走した結果、例年の倍近く75名(うち小学生8名、中学生3名、高校生8名)の参加者が得られた。

大分駅前7時発の貸し切りバスでの参加者が38名、登山口の牧ノ戸峠に直接集まった参加者が37名であった。峠の広場での出発セレモニーでは、加藤支部長があいさつ。そのあと、全員で柔軟体操をして9時30分、健脚組、元氣組、のんびり組の3班に分かれて順番に出発した。

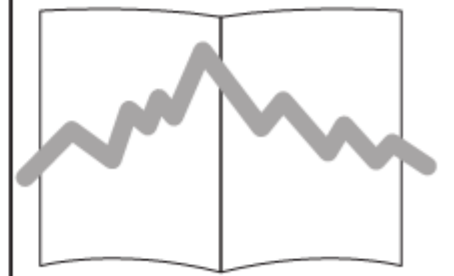
健脚組は中岳へ登って久住山、そして帰りは星生山経由、元氣組は星生山へ寄り道して久住山へ、のんびり組は寄り道なしの久住山へ。これらの班編成は、出発前の本人の希望によるものである。12時30分ごろ、3班がほぼ同時に久住山頂に合流した。昼食後、記念写真を撮って、星生山経由で下る健脚組から順次下山開始。

朝のうちは快晴で、登る途中から雲が出て、降らず、照らずの絶好の登山日和で終わると思っていた天気は、14時前からぱらつきは

じめ、次第に雨足は強くなり、稲妻と雷鳴が轟く天気となった。

初体験の子どもや、初めて山登りをした中高年の参加者たちには、ちよつと怖い経験ともなった体験登山大会であった。しかし、下山後の閉会式で小学生や初体験の中高年に感想を聞くと、「ちよつときつかった。雷が怖かった。でも、とても楽しかった」という声が多かった。山の気象の厳しさも垣間見た、何よりの体験登山であった。参加者の最年少は小学校2年生(4名)、最年長は84歳であった。

(飯田勝之)



図書紹介



『エベレスト登頂請負い業』 村口徳行・著



2011年4月
山と溪谷社刊
四六判 254頁
定価 1680円

本書のタイトル「登頂請負い業」、この言葉から山岳ガイドの本かと思われる人もいるかもしれないが、著者の村口徳行さんは、日本を代表する山岳カメラマンである。テレビの山岳ドキュメンタリー番組で村口さん撮影の映像を見ている人も多いはずだ。しかも、日本人最多となる5回のエベレスト登頂記録（本書出版時）を持っているが、そのほとんどがカメラマンという取材者の立場で登頂した、日本登山界にあつてはきわめて異質な存在でもある。

エベレストは、おそらく世界一人気のある山だ。「世界最高峰」

というブランドゆえに多くの人々を魅了してやまない存在なのだ。だからこそ、これまで幾度もテレビ番組に取り上げられ、そのたびに村口さんの出番が増えていったのだろう。

本書は、その村口さんが1987年から関わり続けてきた、エベレスト登山の体験記である。初めてのエベレスト登山から始まり、その後取材で関わった、三浦洋一さん、野口健さん、渡邊玉枝さん、三浦雄一郎さんとの同行記を中心にエベレストの魅力、エベレスト登山の実際が書かれている。

カメラマンなのに、なぜ「登頂請負い業」なのか。詳しくは本書を読んでいただくとして、村口さんは撮影という、本来、裏方の仕事以外に、登山隊のタクティクス作成から始まり、装備・食糧など細かい準備も手伝い、登山開始後は取材をしつつ、さらに登山隊全

体の安全管理を行なうという一人何役もの役割を担っている。まさにエベレスト登山を知り尽くしているからこそ可能な活躍ぶりだ。

現在、エベレストのノーマルルートに関する限り、ルートワークや荷上げなど、かつては登山隊員が行なうのが当たり前だったことがシェルパの手により行なわれている。極端なことを言えば、自分の体調管理だけして登ることに専念していれば、登頂も可能という世界だ。それだけにシェルパの役割が大きくなっているのだが、本書を読むと村口さんとシェルパの関わりがとても素敵だ。村口さんの人柄もあるのだろうが、その点が、長年のヒマラヤ登山で身につけてきた成功の秘訣だろう。

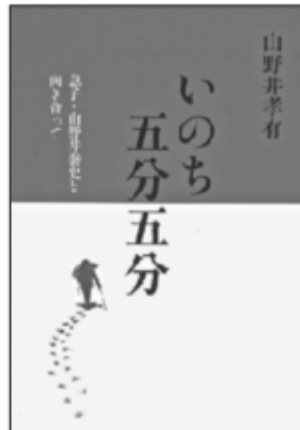
私事だが、本書のあとがきにもあるように今年5月、取材で村口さんと一緒にエベレストへ挑んだ。頂までの行程は、まさに本書に書かれたタクティクス通りで、村口さんは6回目のエベレストの頂に立ち、カメラを回した。「村口さんにとってエベレストとは?」、何気なく聞いた質問への答えは明白だった。「エベレストは仕事場」。本書を読むと、エベレスト登山

が特殊な世界ではなく、身近な存在と感じられるだろう。

僕もエベレストから帰国後、本書を手にとり、機会があればもう一度行ってみたくなった。

本書は、いつかはエベレストに登りたいと思っている人だけでなく、今のエベレストがどうなっているのか少しでも興味がある人にはお勧めだ。村口さんの最初の著作『四度目のエベレスト』（小学館文庫）とあわせて読むと、より楽しめるだろう。（廣瀬 学）

『いのち五分五分——息子・山野井泰史と向き合って』 息子・山野井孝有・著



2011年7月
山と溪谷社刊
四六判 272頁
定価 1890円

登山家を息子に持つ家族の不安と苦悩を、本書で克明にさらけ出した山野井孝有氏は、世界的登山家、山野井泰史氏の父親である。登山やクライミングに加熱していく中学生の息子とともに、「事故があっても責任は一切問わない」という自筆の念書を持って

山岳会の門を叩いてから今日まで、手も足も口も出せず、ずっと見守ることしかできずにきた親の30年間の思いが、この一冊に結集されている。

「登山に関わる費用は親にも誰にも迷惑をかけない、自力で稼ぐ」と言い切って、今日もなお徹底している泰史氏、人情厚く、政治に人生に熱い思いを語る真正直な著者、そして好対照にドンと腰の据わった孝子夫人、著者が「世界一の嫁」と賞賛する泰史氏の妻、登山家の妙子さん。序章からこの家族に引き込まれていく。

登山家が山に挑戦し続ける限り、家族はそのいのちと向き合っているかなければならない。特に2002年のギャチュンカンでの遭難事故の一件は、絶望的な思いと胸の張り裂けそうな願いとの間、葛藤、刻々と入るカトマンズとの交信が織りなす様子に、はらはらさせられた。

生還した泰史・妙子夫妻は両手両足のほとんどの指を凍傷で失ったが、07年に見事な復帰を果たす。大岩壁を妙子さんがよじ登る姿と、それを支える泰史氏の優しさが、それまで岩登りを見たことがない

一般の多くの人々に感動を与えた。「グリーンランド白夜の大岩壁」でのNHKの放映である。著者は、2人の、いのちと向き合う強い精神力、生きる力、支えあう心に誰よりも嬉しさと喜びを隠せない。ひと時の親の幸せが満ちている。

30年間、息子の登山と家族の絆を支え続けてきた著者も、70代を終わろうという年齢になった。息子、登山家泰史氏は、今後も登り続ける。この親子の『いのち五分五分』とは、なかなかのタイトルだ。親子の周囲には、泰史、妙子夫妻の生き方に魅了された応援者の輪が一層広がってきているが、その魅力を余すことなく広く伝えているのは、父親である孝有氏ご本人である。

(書間弘子)

B・シュトラウツァー他・監修

末吉雄二・訳

『セガンティーニ』



2011年3月
西村書店刊
A4判 246頁
定価 3990円

辻村伊助の『スウィス日記』のセガンティーニ美術館訪問を語る

章が『山岳』に載ってから、やがて100年。今なお「山岳画家」セガンティーニの絵を愛好する人が日本山岳会に少なくない。とりわけ強くこの画家に魅せられたのが今は亡き坂倉登喜子さんであって、画集を見るだけで我慢できず、作品の舞台となった山々を見る目的のツアーを計画して実行した。

一般にセガンティーニはスイス東南部のアルプスの山と住民をリアルに描いた画家と思われているのだが、山岳を主役として描く画家たちと違って、眼に見える通りの山の姿を描くことを主目的とする画家でなかった。そのことを現地で坂倉さんは思い知ったが、幻滅はしなかった。この画家の描いた山の姿にひそむ深い意味を感じるきっかけを得られたからだ。

このほど翻訳されて日本山岳会の蔵書となった『セガンティーニ』は、スイスで催された2つの美術館での展覧会の図録を発展させる形で、6人の美術専門家がセガンティーニの絵画の全体像と主要作品について深く探求する論文を並べつつ、多数の作品を美しい印刷によって見せてくれる。

セガンティーニは、スイスに

て山岳地帯の絵を描き始めるより以前、イタリアで描いた絵によつてすでにヨーロッパで名の高い画家となっていた。山岳地帯で生まれた絵が多く残るスイスでは「山岳画家」と思われがちだった。この先入観を取り払って、初期から早すぎた死に至るまでの作品を一望の下におさめて彼の「山岳絵画」の魅力の源泉と題材に込められた深い象徴的な意味を探究する論文が本書に並ぶ。

ただし、専門家たちの精緻な研究が生んだ論文を読み比べて内容を理解しつくすのは容易でない。ひとまず、セガンティーニが「山岳画家」と言われるまでにどのような絵画表現の道を歩んだのかを知ろう。その上で彼の描いた山岳世界を虚心に楽しもうという大らかな気分で、良質の印刷による絵画の鑑賞をおすすめする。

翻訳書は原書にない大原美術館蔵の『アルプスの真昼』を載せてくれている、原書中の同じ題の絵(図版53)と見比べられる。セガンティーニの絵に日本からの影響があったと推理する指摘がある(29頁)が、はたしてそうであろうか。

(宮下啓三)

会 務 報 告

平成23年度第5回(8月度)理事会
議事録

日時 平成23年8月10日 19時より21時20分まで

場所 日本山岳会 会議室

【出席者】尾上会長、吉永・西村
各副会長、高原・森・
小林各常務理事、野沢・
中山・永田・節田・古野・
川瀬各理事、平井・浜
崎各監事、宮崎・橋本
各常任評議員

【委任】 萩原・志賀理事

【オブザーバー】 藤本前副会長

議事に先立ち各プロジェクト
チーム担当理事から現況と今後の
対応、課題等について説明、報告
が行なわれた。

【審議事項】

1・東日本大震災 救援募金の使
途について(宮崎復興支援事業P

Tリーダー)

別添資料により検討内容(①被
害集中の3支部への見舞金 ②大
きな被災会員への見舞金 ③原発
放射線漏れによる強制移住適用さ
れた会員への見舞金 ④その他付
随事項について)の説明、提案が
行なわれた。また被害判明に伴う
詳細金額等の割り振り変更等はP
Tに一任する提案がなされた。

(承認)

2・102号室書架増設について
(節田)

図書関連資料および資料映像
関連資料は年々増加しつつあり、
その整理、保管について合理化を
図るために書架増設と、それに伴
う購入費用9万円強の臨時出費に
ついての説明が行なわれた。

(資料整理、保管等の改善計画
書を提出することを条件に承認)

3・日中韓学生交流登山団長等派
遣について(吉永)

第5回を迎える日中韓3国学
生交流登山は韓国の大屯で8月12
日(18日開催される。JACが派
遣する団長および役員の往復旅費
(航空券)はその半額を負担する。

(承認)

なお、日中韓学生交流登山につ
いてはそのあり方、効果等を総合
的に勘案して再考する時期ではな
いかとの意見が出された。

【協議事項】

1・「高尾の森づくりの会」につ
いて(藤本前副会長・吉永副会長)
「高尾の森づくりの会」について、
別添資料により、今までの経緯、
現状のほか問題点ならびに今後の
課題が報告された。類似活動は14
支部にわたる。JACとしてどう
捉え、扱うのかを早急に整理し基
本方針をまとめていくことが必要
である。公益法人化との関係もあ
る。今後、吉永副会長を窓口とし
て対応を図る。

2・編集(山岳、山、ジャパニ
ズアルパインニュース)業務委託
について(小林、節田)

上記編集は、業務委託について
機関決定して委嘱状を出す等、業
務のルール化を図りたい。なお、
役員および評議員の報酬は細則に
基づき原則無報酬とする。具体案
については次回報告する。

3・定款施行細則について(高原)

総会での意見を踏まえ、細則に
関わる重点事項は①会員復活 ②
終身会員会費 ③役員定年 ④役
員任期の4点とすることに意見集
約された。なお、定款については、
変更はしない。

【報告事項】

1・中華民国山岳協会新理事長当
会訪問について(高原)

8月23日、同協会何中達新理事
長他の当会への訪問予定があり、
尾上会長、吉永副会長、高原常務
理事で対応予定。

2・HAT・J創立20周年式典・
祝賀会について(高原)

9月3日(土) 正午より開催さ
れ、当会として会長代理で、西村
副会長が出席する。

3・臨時事務局担当者会議開催に

ついで(高原)

9月10日(土)11時より当会にて開催する。主な議題は「公益法人化に伴う会計処理について」「支部規程」。関係する役員は出席してもらいたい。

4・上高地土地利用許可の更新依頼(高原・森)

松本自然環境事務所から8月1日付で上高地山岳研究所の土地利用許可期間が平成24年3月末で期限を迎えるにつき、利用許可期間を更新する場合は11月中に行なうよう更新依頼があった。山岳研究所運営委員会でも更新書類の作成をする。

5・四国支部立ち上げに伴う設立委員会講師派遣依頼(高原)

重慶関西支部長より、四国支部設立について、9月10日開催予定の第2回設立委員会に講師派遣依頼があった。派遣する方向で人選等、支部活性化PTと検討する。

6・現時点における予算見通しと予算達成の努力(西村、小林)

先の総会で承認を得ている予算ではあるが、予算収支上の赤字

幅の圧縮、健全財政の確立に向け予算執行の段階で関係者と緊密に連携していきたい。併せて会員増による会費収入増を図ること、事業収入増にも鋭意取り組んでいくための検討を行なっている。

7・会員データ管理システム経過報告(永田)

システム合理化・効率化に着手して約2年が経過しているが、対応する作業要員、予算等の問題もあって未だ完全稼働に至っていないとの経過説明があった。

これに対し、今後短期間に完成させるため期限を切って作業を推進する必要性がないか、そのために要員・予算などについて関係者と協議した方が望ましいのではないか等の意見が出された。

8・屋久島町長他への要望書について(高原)

屋久島町議会で、縄文杉の入山規制などの諸事項に係る条例案が否決されたことに伴い、自然保護委員会世界自然遺産プロジェクトから、屋久島町長あてに条例案採択等についての要望書が出された。

9・みどりの学術賞の候補者の推薦(高原)

内閣府みどりの学術賞選考委員会から7月29日付で候補者推薦依頼があった。推薦は文科省研究振興局あてに8月31日までにに行なう。

10・所蔵写真データ使用許可願(高原)

講談社から7月29日付でウェストン卿の写真を同社が刊行計画の『マンガ偉人伝 かるたコレクション』冒険王編での使用許可願があった。資料映像委員会で検討了解し、通知済み。

11・全国支部懇談会の開催(高原)

10月15日(土)16日、宮城支部担当で、栗駒山界隈にて開催される。尾上会長ほか4名が理事会より参加予定。

12・文科省の立ち入り検査(高原)

おおむね3年に1度の割合で実施される立ち入り検査は、9月実施を目前に日程調整中。

13・新人会員オリエンテーションの開催(高原)

今年度の新人会員オリエンテーションは10月1日に総務委員会担当で開催する。

14・山研利用者数について(森)

上高地山岳研究所の利用状況について別添資料で報告があった。7月末現在だと例年に比べかなりの利用者減となっている(土砂崩れなどで道路の一時不通も影響した)。挽回を図りたい。

15・会報『山』8月号編集報告(節田)

ルーム日誌 8月

- | | |
|-----|--------------------------|
| 1日 | 総務委員会 |
| 2日 | 新法人移行PT スキークラブ |
| 3日 | 集会委員会 海外委員会 |
| 4日 | 常務理事会 インターネット小委員会 |
| 6日 | 三水会 |
| 8日 | スキークラブ スケッチクラブ 高尾の森づくりの会 |
| 9日 | 山岳研究所運営委員会 |
| 10日 | 理事会 休山会 |
| 11日 | 山岳地理クラブ |

12日	支部活性化PT
22日	総務委員会
23日	スキークラブ 00会
24日	青年部 つくも会
25日	山遊会 01会
26日	図書管理委員会
29日	J A C Y O U T H P T
30日	山の日制定PT 復興支援事業PT ゆきわり会
31日	麗山会
8月来室者312名	
会員異動（8月）	
物故	
赤澤清明	（2359）11・7
池田昭二	（4507）11・8・2
退会	
大畑恵宥	（9993）京都
小野光比古	（11163）信濃
市村 敏	（11812）関西
棚瀬慶尚	（11939）岐阜
石内美佐子	（13211）福岡
■訂正とお詫び	
8月（795）号1ページ、3段13行目、「千家哲磨」は「千家啓磨」の誤りでした。訂正してお詫びします。	

図書受入報告（2011年8月）

著 者	書 名	ページ/サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
佐々木茂良	まいにち富士山（新潮新書 No.425）	188p/18cm	新潮社	2011	有元利通氏寄贈
實川欣伸	富士山に千回登りました（日経プレミアシリーズ No.131）	233p/18cm	日本経済新聞出版社	2011	有元利通氏寄贈
ラスキン 著／岸なみ 訳	黄金の河の王様	94P/19cm	東京ラスキン協会	1964	宮下啓三氏寄贈
渡辺俊夫（監修）	自然の美・生活の美 ジョン・ラスキンと近代日本展	384P/27cm	自然の美・生活の美展実行委員会	1997	宮下啓三氏寄贈
河村錠一郎（監修）	ジョン・ラスキンとヴィクトリア朝の美術展	370P/25cm	ラスキン展実行委員会	1993	宮下啓三氏寄贈
全日本山岳写真協会（編）	山稜2011——2011年全日本山岳写真展作品集（撮影地図付）	193p/22cm	全日本山岳写真協会	2011	清水正己氏寄贈
山学同志会（編著）	東西の接点 鹿島槍に挑んだ人たち	305p/21cm	岩峰社	2010	斉藤一男氏寄贈
角幡唯介	雪男は向こうからやって来た	338p/20cm	集英社	2011	著者寄贈
根深誠	世界遺産 白神山地——自然体験・観察・観光ガイド	168p/21cm	七つ森書館	2011	著者寄贈
山本紀夫	天空の帝国 インカ——その謎に挑む（PHP新書 No.744）	237p/18cm	PHP研究所	2011	著者寄贈
山と溪谷社（編）	実用 登山用語データブック（山岳大全シリーズ 別巻）	288P/21cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
山と溪谷社（編）	クライミング用具大全（山岳大全シリーズ No.6）	240P/21cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
川崎実	秘瀑——台高山脈 珠玉の溪	287P/21cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
久保田賢次（編）	山で死んではいけない。遭難防止マニュアル	114pp/28cm	山と溪谷社	2011	出版社寄贈
Wilkinson, Freddie	One Mountain Thousand Summits	342p/24cm	New American Library	2010	購入
Eng, Ronald C. (ed.)	Mountaineering (8th Ed.)——50th Anniversary	597p/24cm	Mountaineers	2010	購入

上記の書籍の他に『日本百名山登山ガイド（上・中・下巻）』『ヤマケイ・アルペンガイド（既刊計10巻）』『新・分県登山ガイド（全47巻）』を出版元の山と溪谷社からご寄贈いただきました。多数のご寄贈図書をありがとうございました。 図書室

I N F
O R M

インフォメーション

A T N

◆20周年記念式典のご案内

福井支部

記念式典および記念講演、記念
山行を行います。

日時 11月12日(土)～13日(日)

日程 12日15時受付開始、15時

30分～20周年記念式典、16

時～松田雄一氏の講演、17

時30分～懇親会

13日11時記念山行(一乗城山)

場所 福井パレスホテル

会費 7000円

宿泊 4500円(1泊朝食付き)

*宿泊の方は帰りにフロン
トにて、個々に精算をお願
いします。

申込 10月10日までに福井支部事

務局 (TEL & FAX 0776

266858)

*申込者に詳細を送ります

◆第29回図書交換会の出品図書募
集について 図書委員会

図書交換会を本年度も開催し

ます。本棚に眠っている山岳書を
お寄せください。

出品図書は10月末日までに、氏
名、会員番号を明記して「日本山

岳会・図書委員会」宛にお送りく
ださい。来年3月に開催する図書

交換会で希望者に頒布します。頒

布価格は図書委員会に一任いただ
きますが、特に希望がある場合は

ご連絡ください。雑誌類は原則と
してお断わります。

なお、図書交換会で頒布が成立
した場合は、価格の8割を出品者

にお返しします。

問合せ 三好まき子 TEL 0908

0198601

◆「山を眺める楽しみ」講演会

東京多摩支部

山を眺める効用、心の望岳、八

王子・立川から見える山々、中央

線・多摩モノレール車窓の山々、

高尾山パノラマ絵図、鳥瞰図など

◆山岳遭難防止セミナー

指導委員会

指導委員会の主催で以下のよ

うなセミナーが開かれる。

について、山岳情報資料室、鳥瞰

図・展望図資料室主宰の藤本一美

氏に講演していただきます。

講演 藤本一美氏

日時 10月17日(月)18時30分～20時

会場 立川市女性総合センター・

アイム アイムホール

(〒190-0012 東京都立川市曙

町2-36-2)

申込 10月7日までにハガキにて、

参加人数(本人を含め)を

岡義雄(〒187-0002 小平市花

小金井3-23-1)まで

◆山岳遭難防止セミナー

指導委員会

指導委員会の主催で以下のよ

うなセミナーが開かれる。

日時 10月22日(土)14時30分～18時

内容 長野県警察山岳遭難救助隊

隊員による、冬山山岳遭難

の実態

近藤謙司氏(国際山岳ガイ

ド)「海外バックカントリ

ーの魅力と危険」

定員 100名

会場 国際協力機構JICA研究

所国際会議場

費用 資料代として500円

申込 メールのみ

⑤ jac-seminar2@everest.jp

◆対談 井上靖『氷壁』とその時代

緑爽会

1995年1月、前穂高岳厳冬

期登攀中に起きたナイロンザイル

切断事故。その遭難を題材にした

新聞連載小説『氷壁』はベストセ

ラーになり、映画化もされました。

あれから半世紀、当事者の一人で

ある石原國利会員をお招きしてお

話をうかがいます。

対談 石原國利会員

近藤信行会員(文芸評論

家)

日時 11月19日(土)13時30分より

場所 日本山岳会104号室

問合せ 松本恒廣 TEL & FAX 0333

3262892)

◆木崎甲子郎、土井庄一郎、松澤

節夫三人展

山や森の心象風景を油彩と木口

木版画(松澤)で表現しています。

会期 10月17日(月)～22日(土)

時間 11時～18時30分(最終日は

16時30分まで)

会場 つぎじTASSぎやらりー

若松屋(中央区築地6-12-

3 TEL 033354101

24)

消えた「小島烏水レリーフ」

全国にある山に関連した人々

の顕彰碑について調査する機会があり、その際に日本山岳会初代会長・小島烏水（本名久太）のレリーフ（写真）が行方不明になっていることが分かりました。上高地にあるW・ウェストンのレリーフの制作者として知られる佐藤久一朗作によるもので、日本山岳会が所蔵していることになっています。

昭和48年12月、小島烏水・木暮理太郎・岡野金次郎三氏の生誕百年記念展が開催されたとき、同時に目録として発行された『近代登山の先駆者たち』（昭和48年12月発行、日本山岳会）に烏水のレリーフの写真が木暮、岡野のレリーフの写真とともに掲載されています。この写真は『小島烏水全集』第十二巻（昭和62年9月、大修館書店）の口絵写真としても掲載さ



小島烏水のレリーフ

れています。

同全集の編著者で烏水研究の第一人者とされる近藤信行氏によれば、かつて図書委員のどなたかがレリーフを撮影していたのを目撃されており、レリーフが外部へ持ち出されたことはないだろうと話されています。前記の生誕百年記念展開催当時は、山岳会が現在の千代田区四番町に移転する前であり、神田錦町の向井ビルから湯島のさくらビルへ移って間もないころと思われます。現在、事務局を通じてこのレリーフの写真をもとに資料映像委員会などに問い合わせたり、古い会員に尋ねたりしていますが、確かな情報は得られていません。

日本山岳会創立にあたり、7人の発起人の中心として奔走し、「山岳会設立の主旨書」を起草し、一方では日本アルプス探検時代に先駆的業績を残し、山岳文学を通して山の文化を発信し続けた小島烏水です。彼のレリーフを相応しい場所に設置して、その功績を偲ぶようになればと思います。この趣旨は、先ごろ土曜懇話会

のあとお話しする機会があつて、尾上会長にも賛同いただいております。

生前、表面に立つて名士になることを避けたという盟友・岡野金次郎が平塚市湘南平（千畳敷山）の一角に立派なレリーフとして顕彰されていることに対し、近代日本登山の黎明期に常に表舞台に立つて登山界をリードした烏水のレリーフが日本山岳会のどこかに眠っているという皮肉な運命の対比を感じざるを得ません。

すでに山岳会には古い事情を知る会員が少なくなっており、難しい「探しもの」になるかもしれません。とりあえず何か情報がありましたら事務局または左記までご一報いただければ幸いに思います。

なお、本稿掲載にあたり、資料映像委員会のご了承をいただいております。

連絡先 TEL 04247558721

FAX 04247558721

sunada-ckn@tbz.t-com.ne.jp

砂田定夫

平成 23 年度(後期)「海外登山基金助成登山計画」募集

海外登山基金委員会

日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。第 26 回目となる今回も、困難を求めている挑戦、発想の新しさ、夢多い計画など、ユニークな登山計画を支援したい、と考えています。会員資格やパーティ編成等の条件は問いません。奮ってご応募ください。

記

- 対象 平成 24 年 2 月～平成 24 年 7 月末に海外の山へ出発する登山隊
- 申込方法 所定の様式（事務局にご請求ください）に記入し、登山計画書（15 通）を添えて申請してください。
- 申込締切 平成 23 年 12 月 31 日
- 審査と助成期間 平成 24 年 1 月中に審査し、理事会で決定、助成。なお、対象となった登山隊は後日、登山報告書の提出を必ずお願いします。JAC 会報『山』に掲載します。
- 問合せ・申込み先 日本山岳会事務局 電話 03-3261-4433

大学山岳部の復活奮闘記

③挫折

落合正治(神奈川大学山岳部 監督)

2004年のお盆休みを利用し、モスクワ経由で、黒海とカスピ海に挟まれた双耳峰エルブルースに6名全員登頂を果たし、頂上で母校応援歌を大合唱した。ところが帰国後、南オセチアのテロ事件発生を知り、背筋が凍った。

1年間に3回の海外遠征は、準備や資金など大きな負担であるが、チャンスは待ったなし。同年11月に格安航空券を入手し、急遽、新人の米内山を含む6名の遠征隊を編成し、シドニーに飛んだ。レンタカーでキングスハイウエーを南下し、スレドボ村の奥手に聳えるコジウスコに登頂した。

明けて05年、GWをフル活用し、アフリカ大陸最高峰キリマンジャロからケニア山登頂へ、という連続登山の綱渡りをやってのけ、折り返し点に立った。順調な滑り出しであった。

1人60^キの荷物を持ち、ソリとバックパックで登る自力登山の真骨頂は、アラスカのデナリ峰(マツキンリー)、北米大陸最高峰だ。06年6月、北極圏白夜のデナリ峰

に挑戦すべく、バンクーバーからアンカレジ経由でタルキートナへと出発する。順調な滑り出しが序盤後半からの悪天候と火災騒ぎ、ストープ不調に加えて、ウィンディコーナーで、学生の渡邊悟のクレバス墜落という致命的惨事に、続行か撤退かというギリギリの判断を迫られる。窮すれば通ずるのか、何とかこの苦難を乗り越えて登頂を果たす。ところが、LPに駆け下がったところで天候悪化のため足止め。帰国便に乗り遅れてしまい、チケット再手配で大きな出費という手土産で帰国した。

いよいよ最難関、世界最高峰チョモランマ挑戦となるが、人も力量も金もない「三ないクラブ」。熱く燃えたぎる「夢」への情熱だけを頼りに、カトマンズ経由でラサに入る。ぬかりなく高所順応してBC、ABCへと進む。ところが、6名のアタックメンバーが体調不良と高度障害により、Cで筆者・隊長の落合と、田中康典、宮守健太の3名になる。背水の陣をしいてアタック開始。小雪舞うC3を未明に出発、極寒マイナス30度、烈風吹き荒ぶ漆黒の闇のなかを手さぐりで高度を稼ぐ。だが、寒さと酸素器具故障で、落合が凍傷となり、セカンドステップで登頂を断念。そして午前10時30分に田中、30分遅れて宮守の2人が、苦難を乗り越え母校KU旗を絶頂に翻させることに成功する。

しかし、その帰路に事件は起きた。凍傷となった落合は両手指なしの状態になりながらも、懸垂して最終キャンプへ帰着した。ところが登頂を果たした宮守は、第一ステップへと最後の力を振り絞って下りてきたものの、ここで座って休んだ時に意識を失ってしまった。シエルパからの交信で真夜中の救出劇開始、C3から3名が救援に向かう。必死の救助活動、高度3000^{メートル}を、なんと6時間もかけて真夜中に帰着。「ここは地獄ですか」「僕は生きていたのでしょか」が宮守の第一声だった。とはいえ、2人の登頂成功を手土産に無事帰国する。そして、セブンサミッツ制覇に南極最高峰のビンソン・マシフを残すのみ、単独大学初制覇に王手をかけた。

(続く)

◆編集後記◆

●毎年、夏山になると、初歩的な原因による事故が目につきます。特に体力が落ちてくる中高年登山者の事故が多いようです。過去の事例から学ぶべく、巻頭で今年の夏山事故を検証してもらいました。

●東日本大震災から半年が経過しました。しかし、原子力発電の放射能漏れと、それに伴う風評被害で、福島はまだ復興のきざしも見えません。東北の山へ「登って、泊まって、買って」キャンペーンを実践している田部井さんに、夏の報告をしてもらいました。●今年の夏山は天候不順で大変でした。カミナリに遭ったり、連日の雨にたたられたり、なかなかシビアでしたが、それも山。楽しむくらいの余裕がほしいと思います。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 796号

2011年(平成23年)9月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビューハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 尾上昇

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社